

令和 4 年 5 月 13 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00044

研究課題名(和文) 身体のパフォーマティヴ性から見た現象学の臨床的展開

研究課題名(英文) A clinical development of the phenomenological approach based on the performativity of somatic experiences

研究代表者

稲垣 諭 (Inagaki, Satoshi)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：80449256

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現象学的なアプローチを主軸に、「生」や「主体」、「身体」がもつパフォーマンス/パフォーマティヴ性を通じてそれらの経験がどのような変容や拡張の実践的な可能性をもつのかの考察を行なった。その際、1) テクノロジーの発明を含む人類という人間の出現全体の問題、2) 臨床経験における主体と身体の問題、3) 性という生物学的、社会学的な複合経験の問題、最後に4) 現象学それ自体のパフォーマンスの拡張に関わる問題から、課題に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代哲学のひとつ現象学において、このパフォーマンスという経験がどのような対象に適応可能で、かつ、それがどこまで適応可能があるのかは明確ではない。生、主体の内面性、身体、人間、性、テクノロジー、これらの存在は、世界内において固有なパフォーマンスを発揮しながら同時にその見かけを装うことになる。このパフォーマンスの二義性に基づき、上記の対象を現象学的な記述とともに解明し、さらにはその現象学そのもののパフォーマンスを更新する試みを行なった。これらの成果は、哲学研究者だけではなくそれ以外の参入者に対しても現象学的アプローチのさらなる展開および適応範囲の拡張を可能にすると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study, based on a phenomenological approach, examined some practical possibilities, which transform and expand experiences of "life," "subject," and "body" etc. through the phenomenological analysis of performativity.

In doing so, we approached the issues from perspectives of 1) the human being emergence, including the invention of technology, 2) the subject and body in clinical experience, 3) the complex biological and sociological experience of sexuality, and finally 4) the extension of phenomenological performativity.

研究分野：西洋哲学・現象学

キーワード：現象学 パフォーマンス 身体 人類 性 臨床

## 1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまで、哲学者 E.フッサールの「身体」および「感情・情動」に関する現象学的分析の成果に基づき、リハビリテーション医学及び精神医学の臨床場面における身体とともにある人間主体の変容にかかわる問いを追求してきた。

身体とともにある主体は、その実践的な能力と行為によって世界と関わっている。しかしその際、発話や身体動作というパフォーマンスはいつでも、その外観と内的な経験の間にズレを生させる。それは他者に対してもそうなのであるが、自分自身にとってもそうした二重化は起こる。こうしたパフォーマンス性の有り様は、これまでは認識論的な誤謬論、あるいは、フッサール現象学であれば対象認識の「超越」の問題として論じられてきた。とはいえ、「真理と仮象」、「本質と事実」といった伝統哲学的な二項図式では捉えきれないパフォーマンス性の固有な作動様式が存在する。例えば、リハビリテーション医療における臨床の経験とは、臨床家と患者が同じ空間を共有して対話ないし治療訓練を行う一回きりの出来事であり、共同行為である。そこにおける真実とは、患者の内面性にも、医療者の内面性にも還元できず、彼らの外的な行為だけに還元することもできない。たとえ反復された関係性であっても、そこには偶然とゆらぎの隙間と不確実性があり、発話と行為が交わることはなく、内的経験と外的な身体動作も連動しない。優秀な臨床家はこの隙間をむしろ臨床のリアルとして感じ取り、次の展開が可能になる選択肢を順次見つけていくのである。しかし、そうした臨床家のパフォーマンスが何を行っているのかはほとんど明らかにされていない。

確かにすでに臨床経験における発話等の社会的、人類学的分析は多数行われてきた。しかし本研究が行うのは、そこでどのような発話が行われているのか（テキスト分析）、あるいは、より有効な対話とは何か（本質論）についての定性的、質的研究ではなく、臨床場面で身体と身体とが対峙することで生起する「パフォーマンス性」がもつ現象学的な経験を析出することであり、それが臨床効果としてどう現れるのかを解明することである。

本研究は、こうしたパフォーマンス性の理解に基づき、さらには現代演劇及び現代美学におけるパフォーマンス性への着目を手がかりに、主体・身体を変容させるための現象学的、臨床的経験のモードがどの程度あるのかを解明することを目指すものである。

## 2. 研究の目的

現象学は、フッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティといった現象学の創設に関わる哲学者を筆頭に、身体とともにある主体の経験を世界内存在として記述し、その普遍的な構造を明示しようと試みてきた。とはいえ、そのアプローチの適用範囲と展開の可能性は確定されていない。本研究は、パフォーマンス性という概念を手がかりに、再度、主体や身体、生命といった経験を見直し、そこから新たな記述や経験の発見の可能性を探る。

その際、以下の四つの主題から上記の課題に取り組む。1) 現象学の創始者であるフッサールの課題でもあった「人類」、なかでもヨーロッパの人間がどんなパフォーマンスを行うことでこの世界の特異的な人間になったのか、かつ、そのことがヨーロッパの危機をもたらすことになったのかという問いを、本研究の基礎的かつ総合的な探究課題として解明することを目指す。また、人類のパフォーマンスに不可欠なものとしてテクノロジーの発明もこの問いに関係しており、テクノロジーそのもののパフォーマンスも具体化する必要がある。

2) 臨床的な経験における主体や身体の変容と、発話や動作のパフォーマンスの関係から明らかにする。しかもここにもテクノロジーや AI の発展が絡み合っており、臨床という経験そのもののパフォーマンスにも変化の兆しが見られる。

3) 「生」や「主体」という経験と不可分に結びつく「性」が行うパフォーマンスについての考察を行うことで、個体としての私たちが意識的であれ、無意識的であれ、どのような社会的振る舞いを構築しているのかを明らかにし、その現象学的な分析を可能にする。

最後に、4) 現象学それ自体のパフォーマンスの拡張に関わる問題を扱う。現象学という学問は、一つの主張や主義ではなく、多様なフィールドにおいて経験を複雑化するのに有効なツールであるが、そのための思考の手続きを明示化する必要がある。

## 3. 研究の方法

上記の目的および課題を段階的に実行するために、テキスト的な資料および映像作品等の収集および分析と考察を行った。現象学にかかわる文献だけではなく、リハビリテーション医療、精神医療にかかわる文献、セクシュアリティにかかわる文献、テクノロジーにかかわる文献と多彩な資料の収集が必要になる。

これら資料を考察しながら、初年度は、研究目的における1)と2)を、二年目は3)を、三年目は4)の課題を順次遂行することとなった。ただしこの課題の取り組みの流れは、当初予定していたものではなかった。というのも、2019年末から2022年初頭にかけて、コロナウイルスの蔓延により、演劇を含むパフォーマンス・アート系の業種や公演が軒並み中止となり、必要な作品の鑑賞および分析が極めて困難となったためである。この二年間というのは、文明化した世界中の人類の行動というパフォーマンスが、劇的な変化、制限、抑制を被った年でもあり、その激変が本研究に与えた影響は小さくないと考えられる。それは必要な芸術作品や公演のデータ収集から臨床的な参与観察、さらには研究者間での交流に関しても同様であるが、そうした困難な状況の中でも課題の遂行を適宜変更しつつ、継続して行った。

#### 4. 研究成果

上記で述べたように、四つの主題から人間のパフォーマンス性の問題に取り組んだ。以下その内容の概括である。

##### (1) フッサール「幾何学の起源」にかかわる人類の固有な経験

現象学者のフッサールは、その晩年に「幾何学の起源」という小論を残している。これは、人類史上、幾何学が出現したと考えられる古代エジプトからギリシアにおいて、新しい人間のタイプ、すなわち「ヨーロッパの人間」が出現したという仮説の展開でもある。今現在においても、ホモ・サピエンスという人類が、どうしてこの世界に現れ、世界中で繁栄することになったのか、その固有なパフォーマンスとは何であったのかの議論は尽きない。とはいえ、フッサールの発生的現象学およびアーティストの荒川修作の「ランディング・サイト」という概念を手がかりにすると、人間の固有な経験として「理念」の把握、工具（道具の道具）の発明、定住にかかわる身体行為の系列が浮き彫りになってくる。上記の解明が、「幾何学の起源」再考—フッサール現象学のリサーチ・プログラム—および「ARAKAWA+GINS「から／に向けて」の「社会／技術」批判」という論文で行われている。さらに書籍として出版した『絶滅へようこそ』（晶文社、2022）においてもそれに関連する考察が行われている。

##### (2) 現象学と臨床における主体のパフォーマンスおよびテクノロジーとの関係

精神医学等における臨床においては、現代の私たちの個としての主体がどのような内面性をもつものとして構成されているのかの分析が必要となる。現代の私たちは、それぞれが固有な内面性をもち、その内面は私私的で、外部からのアクセスができず、かつ、その経験はかけがえのない唯一性をもつと考えている。そのことを疑うことなく振る舞うことができるが、こうした内面性は、歴史的に見ても新しいものであり、18世紀以降に発明され、構築された主体性である。であるとすれば、いつでもそれ以外の主体の可能性は可能であり、病的な経験では、こうした主体性の在り方そのものが本人を苦しめていることが起こりうる。その場合、主体そのものを徹底的に外部化し、AI等のテクノロジーの力を借りることで生まれるケアの可能性を考えることもできる。実際に、メルロ＝ポンティの身体現象学の記述を手がかりにする場合、臨床的な可能性は再現なく広がってしまい、むしろそこには「魔術的な」神秘化が含まれもする。そうしたリスクと距離を取るためにも臨床のテクノロジー化の可能性をいつでも見積もっておく必要がある。上記の考察は、「ありのままの生とインタビュー中心主義の帰趨——「ケアの現象学」の素朴さが映すもの」『実存思想論集』および「リハビリテーション 3.0 とメルロ＝ポンティの身体性」『神経現象学リハビリテーション研究』の論文として掲示されている。

##### (3) 性という経験のパフォーマンス性

現象学だけではなく、伝統的な哲学全般において「性」の問題は、普遍性に値しないものとして扱われてこなかった。より精確には、哲学者とは、すなわちヨーロッパ的白人男性であると自明視されていたことから、その自らの生や、男性以外の性へと注目し、そのことを主題にすることの重要性が問題化することがなかった。フッサールの現象学においても超越論的主観性は、性を欠いた普遍的存在として提示されるが、その普遍性そのものの性的な吟味はなされていない。とはいえ、歴史的に外観してみれば、現象学が主体の内面性と体験を際立たせることで、そこから身体、他者という経験が哲学的な問題となった。さらにこの身体や他者という経験に、女性や性的マイノリティ、障害者といった、これまで不可視であった存在者の経験が主題化されるに至ったのである。このように「性」という経験は、あまりにも身近であると同時に、そこに政治的な権力の問題も絡んでいることから問題化することの困難さを抱えている。しかもそこには生物学的、神経科学的、医学的、社会学的見解が複雑に絡み合っているため、その糸を解きほぐしながら、自らのバイアスを繰り返し解除していく必要がある。そうした方針のもとで、現段階で「性」がもつパフォーマンス性を明示することを試みた。「性というパフォーマンス（1）—性の原則と変容、マジョリティ」、『見えない世界を可視化する「哲学地図」：「ポスト真実」時代を読み解く』、「性というパフォーマンス（2）—性の語り、共同幻想、同意の現象学」、『白山哲学』において上記の考察が行われている。

#### (4) 現象学的アプローチとパフォーマティヴ性

現象学は、主体性の内的経験、体験を記述し、そこに普遍的な構造を見出そうとする。しかし、そのような記述を行うことが、同時にパフォーマティヴにその体験そのものを変化させ、拡張してしまうことがある。これは、臨床家が患者を観察することが、患者の経験そのものを変化させてしまい、当初、知ろうとしていた患者の経験とは異なるものになってしまうこととも関係する。その限りで、体験の記述は一度で終わるわけではなく、むしろ何度も記述を繰り返していく中で体験そのものが変化し、拡張する場面を通過することが重要になる。とはいえ、そのような現象学的な体験を取り出し、記述を更新していく実践はそう簡単なことではない。この場面にこそ、現象学のプラグマティックかつパフォーマティヴな困難さがある。とりわけ内的経験は、クオリアという私秘的であるために、アクセス不可能な質をともなう。それを一度、認めてしまえば、一挙に神秘主義的な傾向も帯びてしまう。そうした袋小路に陥らないためには、多様な科学的、実践的なフィールドにおける外的指標を手がかりにしながら、内的経験を複雑化していく必要がある。そのためには、いくつもの事例をくぐり抜けながら、体験から体験への類推能力を高めていく実践が重要になる。上記の考察は、「現象学のプラグマティクス—内的体験の探り方」、『創発と危機のデッサン 新たな知と経験のフィールドワーク』において展開されている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 稲垣諭	4. 巻 35
2. 論文標題 ありのままの生とインタビュー中心主義の帰趨 「ケアの現象学」の素朴さが映すもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実存思想論集	6. 最初と最後の頁 53-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 稲垣諭	4. 巻 55
2. 論文標題 性というパフォーマンス（2） 性の語り、共同幻想、同意の現象学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 白山哲学	6. 最初と最後の頁 35-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 稲垣諭	4. 巻 9
2. 論文標題 「幾何学の起源」再考 フッサール現象学のリサーチ・プログラム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際哲学研究	6. 最初と最後の頁 93 - 108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 稲垣諭	4. 巻 5
2. 論文標題 リハビリテーション 3.0とメルロ=ポンティの身体性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神経現象学リハビリテーション研究	6. 最初と最後の頁 43 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 稲垣諭
2. 発表標題 性の現実性と変容 性はどのように語られてきたか?
3. 学会等名 国際哲学研究センター「事象の世界地図に向けて」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 稲垣諭
2. 発表標題 「幾何学の起源」再考
3. 学会等名 第29回白山哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲垣諭
2. 発表標題 円環という畏 技術と行為のインテンショナル・アーク
3. 学会等名 第20回認知神経リハビリテーション学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲垣諭
2. 発表標題 セラピストのための現象学—体験世界を探る
3. 学会等名 第5回 肢体不自由療育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoshi Inagaki
2. 発表標題 Against the Fear of Death: Arakawa's Quest for Immortality and Benatar's Anti-Natalism
3. 学会等名 AGxKANSAI 2022 Art and Philosophy in the 22nd Century After ARAKAWA+GINS (国際学会) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲垣諭
2. 発表標題 知と病についての哲学：病識概念の射程
3. 学会等名 第4回日本理学療法哲学・倫理学研究会フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 河本英夫・稲垣諭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学芸みらい社	5. 総ページ数 256
3. 書名 見えない世界を可視化する「哲学地図」：「ポスト真実」時代を読み解く10章	

1. 著者名 河本英夫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学芸みらい社	5. 総ページ数 280
3. 書名 現象学 未来からの光芒:新田義弘教授 追悼論文集	

1. 著者名 三村 尚彦、門林 岳史	4. 発行年 2019年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 315
3. 書名 22世紀の荒川修作 + マドリン・ギンズ	

1. 著者名 稲垣諭	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学芸みらい社	5. 総ページ数 308
3. 書名 創発と危機のデッサン 新たな知と経験のフィールドワーク	

1. 著者名 稲垣諭	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 384
3. 書名 絶滅へようこそ 「終わり」からはじめる哲学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------